

<原著>

オルテガ生の概念－生の属性－

長谷川 高 生

Ortega's Concept of Life – The Attributes of Life –

Kosei HASEGAWA

*A Spanish philosopher, José Ortega y Gasset, offers his raciovitalism or raciohistoricism against Modern rationalism. But, it is rather difficult to understand his vitalism, his concept of life suitable to postmodern way of thinking. Then, I try to consider Ortega's concept of life according to the text of his book, *What is Philosophy?*, particularly its chapter X. Human life is the dynamic being that decides itself towards its future, choosing possibilities freely on its own destiny, in the interaction between self and its world. Considering from what Ortega mentioned, the attributes of life constitute the New philosophy in postmodern age.

*Key words : attributes of life, dynamic being, self and world, freedom and destiny, decision and future
(生の属性、動的存在、自己と世界、自由と運命、決断と未来)

I はじめに

スペインの哲学者オルテガは現代における国際問題、価値・道徳問題など判断の困難な種々の諸課題を解決し得ない近代合理主義に対して、これに代わるべく、20世紀の現代という時代の要請に応える自らの思想、生・理性主義、歴史的理性主義を打ち出したのであるが、その概念内容は近代の合理主義・理性主義的思考に慣れ親しんだ現代人にはかなり理解の困難な諸特徴を有している。この困難さの原因はモダン、すなわち「近代」という時代に対して、これとは別種の視点・視野を有するポストモダン、つまり「近代の後」と

いう時代が要請する思想的営為の必然的帰結であると考えられる。筆者は拙論文『オルテガ哲学的生命論』で、自己と環境との相互交渉により成立するオルテガの生命論に、相互に関連し合う①哲学的生命論、②哲学的環境論、③「生」一般論、④生・理性論、⑤使命論の各視点から接近していったが¹⁾、本論文ではとくにオルテガによる観念論批判の観点から彼の生概念の諸属性に焦点を当ててこれを考察してみよう。

II 生とは何か

西洋近代の哲学の主潮流がデカルト、カン

ト、ヘーゲルに代表される「理性主義」・「合理主義」・「主知主義」であったのに対して、凝結し硬化し固定した生ではなく、「絶えず創造して行く生き生きとした生、また知情意を合わせ持った具体的な生」を、概念、判断など合理的な方法ではなく「生そのものに即した直観的・非合理的な方法」によって捉えようとする現代哲学の一潮流が「生の哲学」である。この思想はその淵源においては「生きんとする盲目的意志」を物自体とし世界の基礎としたシュopenハウアーに始まり、デモニッシュな創造を生の本質とし「力への意志」を主張したニーチェ、生を「創造的進化」と「生命の飛躍」によって捉え、生を把握する「直観」を強調したベルグソン、さらに生の客観面を把握しようとする生の哲学者として、生の表現としての歴史文化を重視し、精神科学を提唱したディルタイ、生を文化の視点から捉えるジンメルなどを代表者とする。その他この流派に近い哲学者としてはシェラー、ヤスパース、ハイデガーなどが挙げられよう²⁾。スペインの哲学者オルテガもこの生の哲学の主唱者の一人である。

オルテガはその生涯を通じて「生」を追求していったが、幾度か彼の立場を変化させている。オルテガの思想的発展は通常、1. 客観主義（1913年まで）、2. 遠近法主義（1914—1923年）、3. 生・理性主義（1924—1955年）、4. 歴史的理性主義（1935—1955年）に時期区分できる。それゆえオルテガの人間の生の哲学はおもに第3期の生・理性主義以降（1924年—）に主張されているのである³⁾。

ところで、オルテガによれば「人間の生」とは「他の一切を包含し、かつ一切を最初に形づくるところの根本實在」であり、「あらゆる事実」に先行する事実、自余一切のものがそこに現われ、一切のものがそこから流れ出る事実」なのである⁴⁾。本論文では、オルテ

ガの言う、この「生」（la vida）とはいかなるものなのか、これを追求してみよう。

彼は『ドン・キホーテに関する思索』において、自分の哲学を要約する文章を記している。すなわち「われはわれとわれの環境である。もし私が私の環境を救わなければ、私自身をも救わないことになる」と言うのである。ここでの第一の「われ」とは私の生、私の生の計画であり、第二の「われ」とはデカルト流の自我である。この第二の自己と第三の環境との相互交流によって第一の私の生が成立するのであるが、本稿が考察するのはこの第一の「私の生」である⁵⁾。

「生」（la vida）の観念をめぐるのは、オルテガは彼の最初の哲学的著作『現代の課題』（1923年）とその直後の論文『生命主義でも理性主義でもない』（1924年）、また『哲学とは何か』（1930年）、『形而上学講義』（1932年）、さらに『体系としての歴史』（1941年）、また死後出版となった『人と人びと』（1957年）などでかなり詳しく論じている。そこでここではオルテガが近代観念論を批判した上で、自らの「生」概念の属性について簡潔に要約している有名な『哲学とは何か』の第10章に依拠してオルテガの言う「生」の概念に焦点を当てて検討してみよう⁶⁾。

Ⅲ デカルトの観念論への批判

まずオルテガは、「根本的な所与として、宇宙の疑うべからざる本源的な現実としての『生きる』ことに会うまでに辿った道筋を、もう一度手短かに思い起こして」みることによって、デカルトのコギト「我思う、ゆえに我あり」に代表される観念論を的確に批判していく。

(1) 「わたくしから独立に実在するものとしての諸事物の実在は問題である」。それ

ゆえ、「われわれは古代人の實在論的命題は放棄した」。

- (2) これに反し、「わたくしが諸事物について考える、わたくしの思考は實在する、だから諸事物の實在はわたくしに、わたくしがそれを考えることに依存するということは疑いえない。これは観念論の命題の確固たる一部である」。
- (3) これによって「われわれはそれを受け入れるのである」が、「受け入れるためにはそれをじゅうぶん理解しておこうと思って、次のように自問した、『わたくしが考えるとき、それらの事物はいかなる意味で、またいかなる仕方であわたくしに依存しているのであるか？それらはわたくしの考えたことでしかないと言うとき、その諸事物は何であるのか？』と」。
- (4) 観念論はこれに対して、「諸事物がわたくしに依存し、わたくしの思考であるというのは、それらがわたくしの意識の、思考の内容であり、わたくしの自我の状態であるという意味においてである」と答える。これが「観念論の命題の第二の部分であって、われわれはこの部分は受け入れなかったわけである」。
- (5) 「それが受け入れられないのは、それがばかげているから」であって、「それが真理でないから」というのではなく、「もっと基本的な理由」によるのである。「ある命題が真理でないというためには、それが意味をもっていることが必要だ。その理解可能な意味について、それが真理でないわれわれは言うのである」。「二たす二は五であるということの意味がわかるから、それは真理でない」と言う。ところが、「観念論の命題の第二の部分は意味をもたない。『丸い四角』というのと同じく無意味である」。「この劇場がこの劇場である限り、

それはわたくしの自我の内容ではありえない。わたくしの自我は広がりをもたないし青くもないが、この劇場は広がりをもち、かつ青い」⁷⁾。

- (6) 「わたくしが包蔵しているもの、わたくしがそれであるもの」は、「ただわたくしが劇場を考え、見ているということ、星を考え、見ているということだけ」であって、「劇場でも星でもない」のだ。「思考とその対象との依存の仕方」は、「観念論が主張するように、わたくしが対象を自分の構成部分のごとくに内にもつ」というのではなく、反対に、「わたくしとは区別されたものとして、わたくしの外に、わたくしの前にその対象を見出す」ということでしかありえない。
- (7) 「意識が閉鎖的なもので、自分自身について、自分の内部にあるものについての自己了解だというのは誤り」である。むしろ逆に、「たとえばわたくしがある星を見たり考えたりすることを了解しているときにわたくしが考えることを自己了解する」のである。「そのとき自己了解されることは、二つは結びついてはいるけれども、相異なる二つのものが實在しているということである」。つまり、「星を見ているわたくしと、わたくしによって見られている星の二つである。星はわたくしを必要とするが、同じくわたくしも星を必要とする」。
- (8) 「観念論が思考、主観、自我は實在するという以上のことを言わないならば、不完全ではあるにしても真理を言っていることになる。けれども、観念論はそれでは満足せずに、實在するのはただ思考、主観、自我のみだとつけ加えるのである」。「こうなるとまちがいである」⁸⁾。
- (9) デカルトが思考を「かくも誤ってとらえ、虚偽化してしまった」のは、デカルトが「存

在する、実在するという概念の伝統的な意味を吟味検討することなく受けとってしまったから」であり、「実体とは実在するために他のいかなるものをも必要とせぬもの」であり、「実体的存在は、自足的な独立的存在である」と信じ込んでしまったからである。しかしオルテガからすれば、「孤立的な存在こそ自足的存在を意味するという前提になんらか疑いえない根底をわれわれは見出すことはできない」。むしろ反対にオルテガは、「根本的で疑いえぬ現実はある—したがって二元性、相関性である—という明瞭の上もない事実」を確認・言明する⁹⁾。

- (10) 「もし主観が実在するならば、それと分ちがたく客観も実在し、またその逆でもある」。「考える自我が実在するならば、わたくしが考えている世界も実在する」。したがって、「根本的な真理は、わたくしと世界の共在」ということである。「実在するとは本源的に共在するということ—わたくしはわたくしでないものを見、他の存在を愛し、さまざまな事物に苦しめられるということ」である。
- (11) それゆえ、「諸事物がわたくしに依存するその仕方は、観念論が見出したと考えるような一方的な依存関係ではない」。たんに諸事物がわたくしの考え感することだというのではなくて、「反対の依存関係、わたくしが諸事物、世界に依存するということでもある」のだ。だからこそ、「問題は相互依存、相関関係、つまりは共在にある」のである¹⁰⁾。

IV 新しい現実

オルテガはデカルトの観念論を以上のように

に批判することによって見出した「生」が、古代人の現実と近代人の現実の双方を含みうる「新しい現実」であると主張し、これが現代における確固たる真の現実、真の存在であるとしたのである。すなわち、

- (1) オルテガは、われわれは「宇宙の根本的データとして、つまり本源的な現実としてまったく新しいものに出くわした」。「それは古代人が出発点とした宇宙的存在とも異なり、また近代人が出発点としたところの主観的存在からも区別されるものであった」。彼は「この発見は新しい現実の発見である上に、新しい存在概念の、新しい存在論—新しい哲学—の、またそれが生に影響を与える限りいっさいの新しき生—新生 *vita nova*—の開始であるということになる」と言うのである。
- (2) オルテガに言わせれば、「古代人にとっては、現実、存在とは『事物』を意味した。近代人にとっては、存在は『内面性』、『主観性』を意味した。われわれにとっては、存在とは『生きる』ことを意味する。それは、それ自身における、また諸事物との内面性・内密性である」。「足下にわれわれの出発点—『生きる』こと—を見るならば、そこにおいては古代も近代もともに保持され、一部分とされ、越えられているのに気づくからである。われわれはより高いレベルに、われわれのレベルに立っており、諸時代の頂上にいる」¹¹⁾。
- (3) オルテガによれば、「われわれが見出す唯一の疑いえない存在は、わたくしと諸事物との相互依存」であり、「諸事物はわたくしによってあるもの、わたくしは諸事物を受けとめるもの」であり、「疑いえない存在とはさしあたり自足的なものではなくて『欠乏的存在』」なのである。「存在することは一と他をともに必要とすることであ

る」¹²⁾。

- (4) さらにオルテガは「根本的な所与とはわたくしと諸事物の共在である」ことに關しても、「われわれは、わたくしが世界とともに実在する仕方、この第一次的現実—統一的であると同時に二重的な—、この本質的二元性という大事実を『共在』と名づけることは不正確であることに気づく」と指摘する。というのは、「共在というのはある事物が他の事物とともにあること、一方があり他方もあるということ以上を意味してはいないから」である。「実在するとか存在するとかいうこの二つの古い概念の静止的・休止的性格は、われわれが表現しようと思っているものをゆがめてしまう」のである¹³⁾。
- (5) オルテガの言明するところ、「世界はそれ自身でわたくしと並んであるのではなく、またわたくしもわたくし自身として世界の側に、それと並んであるのではない」、そうではなくて、「世界はわたくしに対して存在するもの、わたくしと向き合い対立している動的な存在であり、そしてわたくしは世界に対して働きかけるもの、それを見、それを夢想し、それに悩み、それを愛し、また憎むものである」からである。
- (6) オルテガによれば、「わたくしの前の世界の存在はわたくしに働きかけるものであり、同様にわたくしは世界に働きかけるものである」。そしてこれは、「わたくしが世界を見、考え、触り、愛し、憎み、それによって熱中させられ、悲しまされ、またそれを変形し、忍び耐えるところに存在する現実」であり、「これは古来『生きる』、『わたくしの生』、『われわれの生』、各人の生と名づけられているものにほかならない」のである¹⁴⁾。
- (7) それゆえ、「われわれは実在する、共在

する、存在するといった尊敬すべき聖別された言葉の首をねじ切り」、その代わりに、「宇宙にある第一次的な事実『わたくしが生きること』であり、それ以外のすべてはわたくしの生の中にあるか、あるいはないかであると言うことにしよう」とオルテガは主張するのである。かくして「いまや、諸事物、宇宙、神そのものもわたくしの生の内容であると言ってさしつかえない」のである。「『わたくしの生』とはたんにわたくし、わたくしの主観であるだけでなく、世界をも生きることなのであるから」と、彼は言っているのである。

- (8) そしてオルテガは高らかに宣言する。「われわれは何百年来の主観主義を克服したのである—自我はその内密なる牢獄から解放され、もはや存在する唯一のものではなくなり、前講に触れたようなただ一人きりの孤独に悩まなくてすむことになった」。「近代人としてそのうち生きた内部への幽閉」、すなわち「真暗で、世界の光も、欲求や欲望の翼を休める空間もない監禁の場所から」から「逃げ出すことができた」のである。われわれは「自我中心の流刑の場所、固く閉ざされた病人の部屋—それは鏡ばりで、絶望的なまでに自分の顔ばかりが映し出される—の外に出た」のだ。われわれは「外に出て、自由な外気に触れ、宇宙の酸素を胸いっぱい吸って、飛び立とうと羽ばたきし、愛するものへと心は向かっている」のである。
- (9) そして、「ここに改めてまた世界は生の地平となる」。それは「水平線のようにすばらしい湾曲をわれわれの周囲に広げ、われわれの胸に矢のように飛び立たんとする熱望を目ざめさせる」。そして「われわれの胸そのものも血にたぎり、悲しみ喜びをたえず痛く感じとる」。「われわれを世界の

うちに救い出そう—『諸事物のうちに救い出そう』。オルテガは「この最後の言葉を」、「生のプログラムとして二十二歳の時に、観念論のメッカにおいて勉強していたときに書きつけた」のである。そして「将来の熟成時の収獲をほのかに予感しつつ身を震わせたのであった」。かくして、「やがてふたたび星を見るべくわれわれは外に出た」のである¹⁵⁾。

V オルテガの「生」の属性

ではこの新しい現実たる「生」はいかなる属性を有するのであろうか。オルテガの研究者が彼の人間的生の属性について述べるときしばしば採用・引用するのは、オルテガの『哲学とは何か』の第10章である。ガリシア・マウリーニョやエチェゴージェン・オジェータもこの著のこの章に依拠して、オルテガの人間的生の属性を探求している。前者は生の属性として①生きるとは生きていることを自覚すること（Vivir es sentirse vivir）、②生きるとは世界のなかに自らを見出すこと（Vivir es encontrarse en el mundo）、③生とは予見不可能なもの（La vida es lo imprevisto）、④生とは決断であり個人的課題であること（La vida es decisión y problema personal）、⑤結論として生とはわれわれがかくあろうとするものを決断すること（Conclusión: Vivir es decidir lo que vamos a ser）を挙げ¹⁶⁾、後者は①生きるとは自らを知り自らを理解すること（Vivir es saberse y comprenderse）、②生きるとは世界のなかに自らを見出すこと（Vivir es encontrarse en el mundo）、③生とは運命であること（La vida es fatalidad）、④生とは個人的課題であり、決定と自由であること（La vida es problema personal, decisión

y libertad）、⑤生の基本的事実として、生は決断であること（El hecho fundamental de la vida: la vida es decisión）⑥未来、すなわちわれわれの生に特徴的な時間的次元（El futuro, dimensión temporal característica de nuestra vida）を挙げているが¹⁷⁾、ここでは生の属性のこれらの諸点をさらに詳しく追求してみよう。

まずオルテガは「この『生きる』という真の第一次的存在がどのような特殊性をもつか」について「伝統的な哲学の概念やカテゴリー」ではなく、「新しい概念」でとらえようとする。それは「学問的な思考、理論というものを発見した最初の人びと」である「ギリシア人」の状況と同じものであった。彼らには「いかなる学問的な過去もかれらの背後にはなかった。すでに口にされていた概念も聖別されていた技術的用語もなかった。眼前には、かれらが発見した存在があり、手にしているのは日常的な言葉でしかなかった。『すべてのひとが隣人と語る公衆の言葉』しかなかったのである」。ところが、「たちまちにしてこのお粗末な日常的な言葉のうちの あるものが、眼前にあるきわめて重要な現実をみごとにとらえることとなった。あたかも重力が消失したかのごとくに、この下賤の言葉は平俗な言いまわしやおしゃべりの平面から上昇し、高貴なる専門用語の座にのぼり、光背をせおった君主の観念の乗馬のように鼻高々となったのである」¹⁸⁾。オルテガは「生」の発見において、こうしたギリシア人とわれわれが「同じような状況」にあると言うのである。われわれが生という「未知の海岸にはじめて新しい人間として足跡を印す」とき、「平凡陳腐な語彙に手をさし込み、そして身分もなく科学的な過去もないある言葉、ごく平俗な貧しい言葉が突然にある学問的な観念の光によって内側から燃え上がって、専門用語に転

換する」のである¹⁹⁾。

オルテガはここで「生きる」ということに学問的に最も近接して探究してきた二つの科学、すなわち生きることに身体・肉体を通して接近してきた「生物学」と、生きることに精神や心理を通じてアプローチしてきた「心理学」を採り上げて、それらによる生の定義や説明の不十分さを指摘する。まず生物学についてはオルテガに言わせれば、「われわれの生とは、わたくしの生とは何であるか？」という問いに、「生物学の諸定義によって答え、細胞とか身体的諸機能、消化作用、神経組織、等々について語るのは、あまりに素朴であり適切でもない」。「これらのことは仮定的な現実なのであって、じゅうぶんな基礎の上に構成されてはいるが生物学という科学によって構成されたものであって、それをわたくしが研究し、その研究に没頭しているとき、とりまおさずそれはわたくしの生の一活動なのである」。「わたくしの生がわたくしの細胞の中で起こっていることではないのは、夜の世界にわたくしが見る黄金の点、星々において起こっていることでないのと同じこと」なのである。さらにこれに心理学が加わっても、「わたくしの身体的有機体が問題になり、心理学によって媒介される心的有機体がつけ加えられるという場合には、すでに第二的な個別性のことが言われているのであって、これはわたくしが生きているという事実、生きているときに身体的事物や精神的事物にぶつかり、見、分析し、研究している事実を前提としている」。それゆえ、「この種の解答は、いまわれわれが定義づけようと思っている根源的現実にはほとんど触れてはいないのである」²⁰⁾。

したがって「生とは何であるか？」という問題に対して、「遠くに捜し求めてはいけない。かつて学び覚えた知識を思い出そうと努

力してはいけない。基本的な真理はつねに手もとにあるのでなければならない」。なぜなら、「そうであってのみ根本的であるわけだから」である。「捜しに出かけねばならぬ真理とは、ただある一個所にあるということで、特殊的、局地的、地方的な真理、片隅の真理であって、根本的な真理ではない。生とは、われわれがあるところのもの、なすところのものだから、あらゆるもののうちで各人各人にもっとも近いもののこと」なのである²¹⁾。

かくしてオルテガは生への彼の接近の方法を次のように説明している。すなわち「生の純粋な本質の探究において行なうその最初の眺望」はいわば「家具つきの生の活動および出来事の総体」であり、「われわれの方法は生の諸属性を次々に注意して見てゆくということ」であり、しかも、「きわめて外面的なものからはじめて内面的なものへと進み、生の周辺からその脈動する中心へ収斂してしてゆくというやり方」で、オルテガは生に接近するというのである²²⁾。そこで以下、オルテガの言う生の属性を検討してみよう。

(1) まず第一にオルテガは、「生とはわれわれが行ない、われわれに起こるものである—考え、夢み、震えることから、相場をやったり戦争に勝ったりすることまで (Vivir es lo que hacemos y nos pasa — desde pensar o soñar o commovernos hasta jugar a la Bolsa o ganar batallas.)」と言う。「生きたとは奇妙な独特な現実であって、それ自身によって実在するという特権をもっている。すべての生はみずから生きること、生きているとみずから感じることを、実在していることをみずから知ることである (Todo vivir es vivirse, sentirse vivir, saberse existiendo)」。しかもこの場合の知るとは、「知的な認識とか特殊な知識とかをいささかも含まず、その生が

各人に対してもっている驚くべき現前性 (sorprendente presencia) のことである」。オルテガが言うには、「この自覚、自己了解なくしては、歯痛もわれわれにとっては痛くないであろう」²³⁾。

- (2) 次に、オルテガは「われわれの生」と言うときの、「この奇妙な所有語の解明と法的な資格証明」に向かう。彼の見るところ、「われわれの」と言えるのは、「たんに生であるだけでなく、それが生であり、かくかくの生であることをわれわれが了解している」からである。「われわれが知覚し感じるときに、われわれはわれわれを所有することになり、このようにつねに自分自身を所有していること、われわれがやったりそれであったりするものにたえず根本的に随伴していることが、生をそれ以外のすべてのものから区別するのである (Al percibirnos y sentirnos tomamos posesión de nosotros, y este hallarse siempre en posesión de sí mismo, este asistir pertuo y radical a cuanto hacemos y somos diferencia el vivir de todo lo demás.)」。それゆえ、「生きることはまずもって一つの開示であり、ただあることに満足せず、それが何であるかをとらえること、見ること、納得することである。それはわれわれ自身および周囲の世界をたえず発見してゆくこと」なのである。つまり、「この自分を見、自分を感じること、この自分の眼前にわたくしの生の現前すること、それがわたくしに生を所有せしめ、生を『わたくしのもの』たらしめるわけ」なのである。しかし、「痴呆者にはそれが欠如している。気狂いの生はかれのものではない。厳密に言えば、それは生ではない」²⁴⁾。したがって、「生きることはその根底、その核心そのものにおいて、自分を知り理解すること、自分に気

づき自分のまわりにあるものに気づくこと、それ自身において透明な存在たることに存するということ」なのである²⁵⁾。

- (3) それゆえ、「生とはわれわれのやること」であり、「生きることは、それをやることを知っていること、要するに世界において自分自身と出会い、世界の諸事物、諸存在にかかわりあうこと」(vida es lo que hacemos - claro - porque vivir es saber que lo hacemos, es - en suma - encontrarse a sí mismo en el mundo y ocupado con las cosas y seres del mundo.) であるからには、ハイデガーがつとに言明するように、「生きるとは世界の中にあること」(vivir es encontrarse en un mundo) である²⁶⁾。そして「生きるときにわれわれがいる世界とは、快適な、また不快な諸事物、残酷な、また恵み深い諸事物、好意や危険、等々から成っている」(El mundo en que al vivir nos encontramos se compone de cosas agradables y desagradables, atroces y benévolas, favores y peligros;) のである。このとき「肝心なのは、諸事物が物体であるかないかではなく、それがわれわれを動かし、関心をひき、愛撫し、脅迫し、苦しめるということ」であり、「本来、われわれが物体と名づけているものは、われわれに抵抗し、われわれを妨げ、またわれわれを支え、われわれを担うものにほかならず、したがってわれわれに敵対的なもの、あるいは友好的なもののことにほかならない」のである。それゆえ、「生きるとは、各人がこの働きかけてくる諸問題や諸事物の境界内において自分自身を見出すこと」である。かくして「生は、どのようにしてかはともかく、自分自身を見出すと同時に世界を発見する。対象物であれ人間であれ、もしも他の諸事物によって地球が満

たされているのでなければ、生きるということもない」。「生きるとは、諸事物や諸光景を見、愛し、憎み、欲し、恐れること (es ver cosas y escenas, amarlas u odiarlas, desearlas o temerlas.)」であり、「すべて生きることは、自分自身ではない他のものにかかずらうことであり、環境とともに生きることである (Todo vivir es ocuparse con lo otro que no es uno mismo, todo vivir es convivir con una circunstancia.)」²⁷⁾。

- (4) それゆえ、「われわれの生はたんにわれわれ自身ではなく、その一部をなすのはわれわれの世界である」。「われわれの生は当の人物が諸事物にかまけ、諸事物に従事することにおいて存立する。われわれの生は明らかにわれわれ自身とわれわれの世界とに同様に依拠している」。それゆえ「われわれの生」を「世界と自我とを結びつける一つの弓として表象すること」が可能である (Por eso podemos representar <<nuestra vida>> como un arco que une el mundo y yo;)。しかし、「まず自我があり、次いで世界があるというのではなくて、両者は同時にある」のである (pero no es primero yo y luego el mundo, sino ambos a la vez.)。「そのどちらかの項がわれわれにより近いというわけではない」。「われわれ自身をまず了解し、それから周囲を了解するのではなく、そもそも生は根本的に、世界に対して、世界とともに、世界のうちで、その取引きに没頭し、その問題、偶然の成行きに沈潜して自分を見出すこと (vivir es, desde luego, en su propia raíz, hallarse frente al mundo, con el mundo, dentro del mundo, sumergido en su tráfigo, en sus problemas en su trama azarosa.)」である。しかし、「その反対も

また真理なので、この世界はわれわれ各人を動かすもののみでつくられており、われわれから切り離すことはできない」。「われわれは世界とともに生まれ出る」のである。「人間と世界」とは、「ゼウスの双生児 (ディオスクビロイ) [カストールとポルックス] 一心の合致した神々 dii consentes」のように、「ともに生まれ、ともに生きた古代ギリシアやローマの神々のカップルのようなもの」なのである²⁸⁾。

- (5) しかし、「今日のこの世界にあるかないかは自由ではない」。ひとは生を放棄することができるが、「生きている限りは、現に生きている世界を選ぶというわけにはゆかない」。このことがわれわれの生にきわめて「ドラマティックな相貌」を与える (Esto da a nuestra existencia un gesto terriblemente dramático.)。「生きる」ということは、「まず理由もわからずに、交換不可能な今日のこの世界に落ち込み、沈み、投げ出されてあるのを見出すのみ」である (Vivir ... es encontrarse de pronto, y sin saber cómo, caído, sumergido, proyectado en un mundo incanjeable, en este de ahora.)。「われわれの生は、あらかじめ承諾を与えないのに現存していることへの不断の驚きとともににはじまる」。われわれは「思ってもみなかった世界における難破者 (náufragos) のごときもの」である。「われわれがみずからに生を与えたのではなく、まさしくわれわれがわれわれ自身を見出したときに生にめぐり合うのである」²⁹⁾。「生」は、「根本的な諸点において」、「つねに予見しがたいもの」である。「生に足をふみ入れる前に、いつでも具体的な決まったものである舞台にのぼる前に、われわれは通告されるわけではないし、準備をさせてくれるわけでもない」のである。

オルテガによれば、「この予見できない不意打ちという性格は生の本質的特徴」なのである (Este carácter súbito e imprevisto es esencial en la vida.)。「生はその全体としても一瞬一瞬においても、われわれに銃口をつきつけて発射されたピストル射撃のようなどころがある」のである³⁰⁾。

- (6) それゆえ、「生はわれわれに与えられるもの—もっとうまく言えば、われわれに投げ与えられるもの、あるいはわれわれが生へと投げ出されるもの」(La vida nos es dada - mejor dicho, nos es arrojada o somos arrojados a ella) であるとしても、「このわれわれに与えられるものたる生は、われわれが解決せねばならない問題である」(eso que es dado, la vida, es un problema que necesitamos resolver nosotros.)。しかも、「このことはとくに葛藤とか窮況とか特徴づけられる特別困難場合にのみそうなのではなく、いつでもそうなのである」。「われわれは宙ぶらりんにみずからを支えながら生きているのであり、われわれの生をまるごと抱えながら世界の辻々に生きているのである (vivimos sosteniéndonos en vilo a nosotros mismos, llevando en peso nuestra vida por entre las esquinas del mundo.)。われわれの生活が悲しいものであるか陽気なものであるかは予断を許さない。いずれであっても、それは問題を自分でたえず解決してゆかねばならぬ必然性から成り立っているのである」³¹⁾。

- (7) しかも、「生はけっしてあらかじめ決定されたものとして感じられることはない」(Esta no se siente nunca prefijada.) ゆえに、「明日起こることにいかに大きな確信をもってしようと、われわれはつねにそれを一つの可能性と見る」のである

(Por muy seguros que estemos de lo que nos va a pasar mañana lo vemos siempre como una posibilidad.)。「これは先に挙げたものとともに、われわれの生のもう一つの本質的なドラマティックな属性である」(Este es otro esencial y dramático atributo de nuestra vida, que va unido al anterior.)。オルテガに言わせれば、「生があらゆる瞬間に解決せねばならない大きな、あるいは小さな問題であり、その解決を他の存在に転嫁することはできないということによって、生がけっして解決された問題ではなく、あらゆる瞬間にわれわれはさまざまな可能性の間で選択を強いられている」のである。彼によれば、「たとえわれわれの生がそこで展開される世界を選びとることは許されていないとしても—これは宿命の次元である—、ある程度の余地、さまざまな可能性の生の地平はあるのだ—これが自由の次元である—」(Si no nos es dado escoger el mundo en que va a deslizarse nuestra vida - y ésta es su dimensión de fatalidad - nos encontramos con un cierto margen, con un horizonte vital de posibilidades - y ésta es su dimensión de libertad -)。したがって、「生は宿命の中の自由であり、自由の中の宿命だということになる」(vida es, pues, la libertad en la fatalidad y la fatalidad en la libertad.) のである³²⁾。

- (8) それゆえ、「われわれは生の中に投げ出されている。しかも同時に、そこへと投げ出されているものをわれわれ自身の考えによってつくり、工作しなければならない」のである (Hemos sido arrojados en nuestra vida y, a la vez, eso en que hemos sido arrojados tenemos que hacerlo por nuestra cuenta, por decirlo

así, fabricarlo.)。言い方を換えれば、「われわれの生はわれわれの存在である。われわれはそういう存在であって、それ以上のものではない」。しかもオルテガによれば、「この存在はあらかじめ決定され、前もって解決されているものではない」がゆえ、「われわれみずからが決定することが必要であり、われわれがいかにあるべきかを決定しなければならない」(necesitamos decidirlo nosotros, tenemos que decidir lo que vamos a ser;)。つまり、「自分自身を宙ぶらりんに保ち、自己の存在を支える」存在なのである。「そこには休息も休止もない」。なぜなら、「生物学的な生の一形態である眠りは、われわれの言う根本的な意味での生にとっては実在しない」からである³³⁾。オルテガの見るところ、いまや「われわれのいる深みでは、生きるとはわれわれがそうあろうとするものを決断せねばならぬこととしてあらわれている」。「われわれは、はじめに言った、生とはわれわれのやること、世界の諸事物とのかかわりの総体であるでは満足できなくなっている」のである。なぜなら、「このやること、かわることは自動的・機械的に、あたかもレコードの演奏曲目のようにわれわれに課されたものとしてやってくるのではなく、それがまさに決断されたものであることが生を保持するゆえんであり、実行は大部分機械的なものであるということを知る」からである。

- (9) オルテガに言わせれば、「生きるとはわれわれがそうあろうとするものをたえず決定すること」であるという命題は「途方もないパラドクス」をはらんでいるのである。すなわち、「現にあるものよりもこれからあろうとするものにおいて存立する存在! したがって、まだないものに存する存在!」、

「この測りしれない本質的なパラドクスこそわれわれの生というもの」なのである(! Un ser que consiste, más que en lo que es, en lo que va a ser; por tanto, en lo que aún no es ! Pues esta esencial, abismática paradoja es nuestra vida.)。そしてこれこそが、「厳密に言って真理なのである」と彼は言明しているのである³⁴⁾。生においては、「その決意を生かしつづけ、注意深くありつづけるためには、一瞬一瞬それを新たに養ってゆくのでなければならない」。「われわれの決断は、たとえいかに確固たるものであっても、つねに強められなければならない、火薬が役にたたなくなる猟銃のようにたえず装填しなおされるのでなければならない。要するに、あらためて決断されなおされねばならない」のである³⁵⁾。

- (10) オルテガは「以上すべてから直接的な帰結」を引き出す。すなわち、「もしもわれわれの生が、そうあろうとするものを決断することに存するとすれば」、「これは、われわれの生の根本に時間的属性—われわれがあろうとするものを決断すること、つまり未来—があることを意味する」(si nuestra vida consiste en decidir lo que vamos a ser, quiere decirse que en la raíz misma de nuestra vida hay un atributo temporal: decidir lo que vamos a ser - por tanto, el futuro.)。したがって「第一に、われわれの生はなによりもまず未来との出会い (toparse con el futuro) である」。彼は「ここにもまた一つのパラドクス」を発見する。というのは、「われわれがまず第一に生きるのは現在でも過去でもない。生は前方へとみずからを投ずる活動であり、現在や過去はこの未来との関係においてあとから発見されるもの」だからである。それゆえ、「生は未来へと働き込んでゆくこ

と futurición であり、まだ存在しないものである」(La vida es futurición, es lo que aún no es.) とオルテガは言うのである³⁶⁾。

Ⅵ おわりに

以上、筆者はおもにオルテガの『哲学とは何か』を参考にして、彼の言う「人間的生」の諸属性を検討・解明してきた。オルテガの人間的生はハイデガーの「世界 - 内 - 存在」の構造のごとく、自己と周囲世界とにより成立し、環境性、運命性、可能性、ドラマ性、問題性、宿命性、自由性、決断性、時間（未来）性などの豊富な特徴を提示するものであった。すなわち、人間的生とは「自己」と「世界」との相互交流のなかで、その立場に置かれた「運命」を甘受しつつ「自由」に「可能性」を選択し、「未来」に向けて「自己決定」していく「ダイナミックな存在」なのである。これらの諸属性を有するオルテガの人間的生の概念は近代の合理主義的世界観が袋小路に入り込んでいる現状において、ポストモダン時代の人間像・社会像の豊饒な基礎づけを提供するものとなろう。

<註>

- 1) 長谷川高生：オルテガ哲学的生命論—ポストモダンの政治哲学における人間像の原型を求めて—、政治経済史学、414、2001
- 2) 「生の哲学」の項、哲学辞典、819-820、平凡社、1971；柴野博子：「生の哲学」の項、現代哲学辞典、386-387、講談社、1970
- 3) José Ferrater Mora: Ortega y Gasset, etapas de una filosofía, Primera edición en Biblioteca Breve de Bolsillo, Seix Barral, Barcelona, 1973; オルテガ・イ・ガセット、佐々木孝訳、解説、ヴィルヘルム・デイルタイと生の理念、未来社、1984
- 4) José Ortega y Gasset: Historia como sistema (1941), Obras completas 6, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 井上正訳：体系としての歴史、オルテガ著作集4、318-319、白水社、1970
- 5) José Ortega y Gasset: Meditaciones del 《Quijote》(1914), Obras Completas 1, 322, Alianza Editorial, 1983; 長南実訳：ドン・キホーテをめぐる省察、オルテガ著作集1、32、白水社、1970；オルテガ・イ・ガセット、神吉敬三訳：解説、大衆の反逆、247、角川書店、1967
- 6) José Ortega y Gasset: ¿Qué es filosofía? (1957), Obras completas 7, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 生松敬三訳：哲学とは何か、オルテガ著作集6、白水社、1970；Victor Ouimette: José Ortega y Gasset, 103-106, Twayne Publishers, Boston, 1982
- 7) Ibid., 408-409；同上訳書、213
- 8) Ibid., 409；同上訳書、214
- 9) Ibid., 409-410；同上訳書、215
- 10) Ibid., 409-410；同上訳書、214-215
- 11) Ibid., 408；同上訳書、212
- 12) Ibid., 410；同上訳書、215-216
- 13) Ibid., 410；同上訳書、216
- 14) Ibid., 410-411；同上訳書、216-217
- 15) Ibid., 411；同上訳書、217
- 16) José María García-Mauriño: Ortega y Gasset ¿Qué es filosofía? Preguntas y respuestas al texto, 33ss., Cuadernos de Filosofía (C.O.U. y Selectividad), Ediciones del Orto, 1999
- 17) Javier Echegoyen Olleta, Miguel García-Baró: Ortega y Gasset ¿Qué es filosofía? Lección X, 39ss., Mare Nostrum,

Madrid, 2000

* またエチェゴージェン・オジェータは 'Categorías del Vivir', "Historia de la Filosofía Volumen 3: Filosofía Contemporánea", <http://www.e-torredebabe.com/Historia-de-la-filosofia/> ではオルテガの生の属性として次の6つを挙げている。①生きるとは自らを知り自らを理解すること (Vivir es saberse y comprenderse)、②生とはわれわれの生であること (La vida es nuestra vida)、③生きるとは世界のなかに自らを見出すこと (Vivir es encontrarse en el mundo)、④生とは運命であること (La vida es fatalidad)、⑤生とは自由であること (La vida es libertad)、⑥生とは未来主義であること (La vida es futurición)。

18) Op., cit., 411-412; 前掲訳書、217-218 註 (6)

19) Ibid., 412; 同上訳書、219

20) Ibid., 413; 同上訳書、220

21) Ibid., 413; 同上訳書、220-221

22) Ibid., 413-414; 同上訳書、221-222

23) Ibid., 414; 同上訳書、222

24) Ibid., 414-415; 同上訳書、222-223 * オルテガによれば、人間的生に対して、「石は石であることをみずから感じてもしないし知ってもいない。すべてのものと同様、石は石そのものであり、絶対的に盲目である」。

25) Ibid., 415; 同上訳書、224

26) Ibid., 415-416; 同上訳書 224-225 * オルテガは「生きるとは世界の中にあることだ」という定義の言及において、ハイデガーよりも先駆していたことを以下のよう主張している。「この自分自身と出会

う [ある状態にある]、世界、かかわりあるといった平俗な言葉は、いまやこの新しい哲学の専門用語となる。そのそれぞれについて長々と語ることはできようが、わたくしはただ『生きるとは世界の中にあることだ』という定義はこの講義における主要な諸観念と同じくすでにわたくしの公にしている著作の中に含まれていることに注意しておくにとどめよう。とくに実在の観念に関してはそのことを注意しておく必要がある。わたくしはそれのいちばん早い主張者であることの権利を要求する。まさにそのゆえに、生の分析をもっとも内部にまで押し進めたのがドイツの新しい哲学者マルティン・ハイデガーであることを喜んで認めるものである」。

27) Ibid., 416; 同上訳書、225

28) Ibid., 416-417; 同上訳書、225-226

29) Ibid., 417; 同上訳書、226

30) Ibid., 417; 同上訳書、227

31) Ibid., 417-418; 同上訳書、227-228

32) Ibid., 418; 同上訳書、228

33) Ibid., 418; 同上訳書、228-229 * 休息・休止、眠りについてはオルテガは次のように言及している。「眠りにおいてはわれわれは生きてはいないので、目覚めて生をふたたびはじめるときにわれわれは、夢にみたものの変わりやすい思い出によって肥え太った生を見出すわけである」。

34) Ibid., 419; 同上訳書、230

35) Ibid., 420; 同上訳書、231

36) Ibid., 420; 同上訳書、231-232